

エクステンジリングス

甘木数彦

第二章

二

部室の床に座って、鳶春は廊下から聞こえてくるお昼の放送に耳を傾けていた。放送部と演劇部の合作ドラマ「薔薇と宿題」の第二三話だ。すぐそばでは厘一が椅子に座ってクリームパンを食べながら、端末でニュースを読んでいる。

鳶春の背中にはゴムバンドで黒い機器が固定されている。機器からはコードが伸びており、壁のコンセントに刺さっていた。こうやって僅かだが機体に充電するのが昼休みの日課となっている。一人じゃ退屈だろうということで毎回、厘一も付き合ってくれていた。

「なに読んでるんだ？」

「誘拐殺害。三人目の被害者だと」

「市内にいるんだから、すぐ捕まりそうなのに」

「だな。カメラ持ったヤツとか警官とかウロウロしてるし。ってか、ここってあんなに警官いたんだな」

会話が途切れ、自然と空気が重たくなる。遠くから、昼食を終えた生徒のざわめきが聞こえはじめていた。

床に置かれていた鳶春の端末が振動した。鳶春は手を伸ばして端末を引き寄せる。知らないアドレスからのメールだ。件名には「ウェンディです」と書かれていた。鳶春は期待が膨らむのを感じながらメールを開いた。

ウェンディです。何か新しいことは判った？ こっちはさっぱり。もう一度あの広場に行ってみようと思うんだけど、今日の一七時にあの道の入り口とかどう？

鳶春は送り主のアドレスを登録してから、もう一度メールを開いた。何度読み返しても、そこに書かれていることは変わらない。

「どした？」

端末を凝視する鳶春に、厘一は尋ねた。

「ん？ なんかな変なエロメール。山羊と、牛が……」

「ほほう。興味深いな。なんでそれで返事を書いてるんだ？」

鳶春が端末から顔を上げると、いつの間にか厘一は目の前に立っていた。鳶春は咄嗟に端末の画面を下に伏せる。

「あのこれは別のメール」

「誰に」

「誰だっていいだろ」

見上げる鳶春と見下ろす厘一。黙っていると厘一の顔はひどく冷酷そうだった。

「怪しい。知らない女の気配がある」

狙っているのかいないのか、厘一のこうした発言のおかげで、二人は部活やクラスなどでカップル扱いされるようになっていた。最初はいちいち反応していた鳶春だったが、最近では完全に諦めるようになっていた。

「はいはい。解ったよ」

鳶春はウェンディと知り合ってからのことを話した。そうでもしないと、クラスや部活でまた蒸し返されかねない。痴話ゲンカ、浮気、三角関係 周囲が面白いのは明らかだった。

「そうか。とうとう鳶春にもそういう相手が。よかったな」

話を聞き終えた厘一は、すがすがしい笑顔で言った。

「そうだな。おれも我ながら意外だ」

「せっかくだし、上手くいくといいな。いきなり公園デートだろ？ かなり脈あるぞ、それ。でそのうち彼女優先でしかない友達であるオレのことなんて全く相手にしなくなるわけだ」

声は普通だけど絶対に不機嫌だ。それもかなり。鳶春は内心、頭を抱えた。話せば話したでこうなることは予想できた。それでもしつこく追求されるよりはマシかと思ったのだが、判断ミスだったかもしれない。

「いやいやいや、上手くいかないって。おれってほら、こういうの初めてだし、それに文字通り鋼の体だから」

慌ててフォローしてみる。

「そうだな。もし駄目だったらオレが慰めてやるから、まずは明日のデートをがんばってこいよ。デート。デートかぁ」

最後の言い方が気になったが、とりあえず機嫌は持ち直したようだった。

なんでおれ、こんな苦労してるんだらう。鳶春は情けなくなった。

「宿題の提出期限は終わりだ……。薔薇の花の名において、居残りを命ずる！ 放課後、職員室に来なさい」

廊下から聞こえてくる放送ドラマは、いつの間にかクライマックスを迎えていた。

ウェンディは一七時に少し遅れてやってきた。

「ごめん。これ買ってて。ほら、途中って見たことないでしょ？」

そう言って懐中電灯を差し出す。鳶春は懐中電灯を受け取ると、道の奥を照らしてみた。未塗装の素っ気ない壁が真っ直ぐに伸びている。先の方は光が届かず、見えない。鳶春が先に立ち、二人は奥へと進んでいった。

「ね、そっちは何か調べてみた？」

鳶春は広場や狭間道の公開画像が一枚もないことを話した。

「この街のことよく知らないんだけど、それってかなり変じゃない？」

「他に建物の外でそんな場所はないと思う」

「それってさ、市役所とかに問い合わせたら何か出てこないかな」

「たぶん、そうですか、とか言われて終わりじゃないかな。市有地でもないし」

「でも、怪しいから調べてくれって言えば」

「あんまりアテにならないだろうな。ああいう場所って、隣接する建物の持ち主が勝手に植木を育ててたりとかもするから。ま、普通はそういう場所でも画像はあるんだけど。ところで、そっちは」

「さっぱり。流行ってた都市計画の会社だったみたいだけど、ああいうのってどこも長続

きしなかったからねー」

視界が照らされているおかげで、歩くペースは前よりも速い。互いの指先がぶつかることもなかった。やがて、先の方で道がカーブしている所まで来た。

「こうして見ると、やっぱりここ埃っぽい」

「次からはマスクして来るかな」

「アレルギー？」

「なわけないだろ。いつの時代の人間だよ。でもま、似たようなもんか」

鳶春は一瞬、自分の体のことを打ち明けてみようかと思った。これからも会ったりするのなら、早いうちに言っておいた方がスッキリするような気がしたのだ。とはいえ、いきなりそんな話をされて引かれるのも怖かった。

「そういえばさ、ここがどうなってるのか考えてみたんだけど」

悩んでいるうちにウェンディが喋りはじめてしまった。

「普通に考えると、隣の敷地にどんどん食い込んでいく構造でしょ。でも、それはないわけ。地図で見たけど、ずっと普通の建物が続いているし」

「まあね。地図どおりに当てはめると、場所によっては通りにはみ出してる部分もある」

「でさ、まず一本の長いヒモをイメージして。で、その中央に広場がある。ね？ その中央を指で挟んで捻ると、二重螺旋みたいな形になる。これだと中心で螺旋を描いて、しかも左右の端が別の場所に出る、と」

確かに、ウェンディの言うとおりであった。

「次に、中央を上を持ち上げる。ヒモは長いから、中央に向かって緩やかな上り坂になる」

「じゃあ、あの広場は上の階にあるってこと？」

「そ。実際はどっか早い時点で上の階に出て、螺旋のほとんどはそこで回ってるはず。今日はそれも確かめてみようと思って」

ウェンディはそう言うと、鳶春の手に何かを握らせた。振り返られないのではっきりはしないが、小さなスーパーボールのようだった。

「これ持って鳶春君が先に行く。で、そこから転がして私の所で見えたら道が坂になってる証拠」

「でも、どうやって転がってきたか確かめるんだ？」

「懐中電灯がもう一本あるから」

鳶春の後方から、明かりが加わる。

「じゃ、転がす前に思いっきり叫んでね」

その言葉に見送られ、鳶春は一人出先へと進んでいった。

一人になると、急に虚しさが高まってきた。考えてみればせっかく会ったのに、このこと以外はほとんど話してない。自分で話題を振らないと駄目だ。しかし何を。ただでさえパツとしない男だと思われているらしいのに、下手なことを言ったらイメージアップどころかますます冴えない奴だと思われかねない。だいたい、イギリス人にウケる話題ってどんな感じなんだろう。さりげないユーモア。ウィット？ ウィットってなんだ？

そんなことを考えているうちに、ずいぶんウェンディから遠ざかってしまった。鳶春は少しでも声が後方へ届きやすいように頭を上げると、大声で叫んでからボールを手放した。弾みながらボールの遠ざかる音が聞こえる。

ひょっとして失敗したのかと不安になりかけた頃、遠くから声が聞こえてきた。曖昧にぼやけてしまってなんと言っているのかは判らなかったが、ウエンディの声だ。しばらくして足音が近付いてきた。

「どうだった？」

「成功。やっぱり坂になってるみたい。回収しなかったから、帰りにどこまで転がったか判るよ」

「坂になってるようには見えないけど」

「見渡せる範囲が限られてるからじゃない？ 暗ければなおさら。これであとは地図で上の階のどこかを調べるだけ。とりあえず、先に行こ」

ウエンディに促され、鳶春はまた歩き出す。

「上の階ってのは考えてなかった。むしろ、螺旋状っていうのが錯覚かと思ってたよ」

「あー、わたしはそれは思いつかなかったな。そもそも、無理があるよそれ」

言うとウエンディは鼻から空気が抜けるような、短い笑いを漏らす。とめどなく落ち込みそうになるのを鳶春は精一杯こらえた。

「発想力がないってたまに言われる」

「美術部なんだよね。大丈夫なの？ そんなんで」

「あんまり、大丈夫じゃ、ない」

自分で言いながら、どんどん声が暗くなるのが判る。

「でも、それで諦めずにやってるんだからいいんじゃないの？」

思いがけない優しい声に鳶春は思わず振り返ろうとして、頬を壁にぶつけてしまった。

「なにしてるんだか」

後ろからウエンディの笑い声が柔らかく響く。不意にそっと、手の甲がくすぐられた。それだけのことで、鳶春は残された生身の脳が急激に発熱するような気がした。

やがて鳶春とウエンディは広場に出た。相変わらずの夕暮れが部屋いっぱいに満ち、壁に投影された夕暮れは透明な宵闇にゆったりと包まれている。

二人は同時に、視界の端で動く物を捉えた。慌ててそちらに目を向けると、厚いドアの向こうへ地味な色合いの紺のスカートが消えるところだった。鳶春は呼びかけながらそちらへ駆け寄ろうとしたものの、ドアは閉じられてしまった。

「写真、撮れなかった」

振り返ればウエンディは片手で端末を構えていた。

「今の人、俺が呼んだのに無視したよな」

「見られたら困ることでもあるとか」

誰かが戻ってくることを期待して、二人はその場で待ち続けた。しかし、誰も出てこない。日はすっかり沈み、空は星月が占領している。星はあまりにも数が多く、鳶春にはそこだけ嘘くさく感じられた。

「帰るか」

鳶春は手にした懐中電灯を振ると狭間道の方へ歩こうとし、その場に固まった。隣でウエンディも一歩を踏み出したきり、動かない。

「なあ、道は」

「ない、ね」

二人が入ってきたはずの場所には周囲と同じ草茂る野原が広がり、地平線の上には夜空が続いている。

「閉じこめられた」

ウェンディの気抜けした声が、妙にハッキリと聞こえた。

それからしばらく、二人は外へ出るための方法を捜して広場を歩き回った。目眩がするほど精細な風景を映し出す壁に指を這わせ、閉ざされた扉の破壊を試みる。草を踏む二人のくぐもった足音が徐々に慌ただしさを増す。だが全ては無駄に終わり、自然と二人は広場の中央に並んで腰を下ろした。

しばらくすると急に辺りが薄暗くなった。星も遠景も消え、のっぺりした壁や天井が現れる。そうするとそこはもはや広場ではなく、ただの広い部屋だった。草が生えている場所も地面とは思えず、ただの床でしかない。そして、がらんとした室内に雑多な青草が茂る様はどうにも場違いだった。

少し離れたところに弱い照明がひとつだけ灯り、周囲を軟らかく照らした。鳶春とウェンディは前方の扉を眺めたまま、黙って座っていた。最悪の場合、死ぬかも知れないというのに、鳶春は自分が落ち着いているのを不思議に思っていた。確かに成り行きを心配する気持ちはあったが、それは曇りの日に傘を持たずに出かけたときのような、ささやかなものだった。

それよりも、鳶春にはウェンディのことが気がかりだった。こんな所に閉じこめられて怯えているのか、ウェンディは一言も喋らずにぼんやりとしている。鳶春はなんとか励まそうと思ったのだが、何を言っても的はずれで、軽蔑されそうな気がした。

大きく息を吐きながら、ウェンディが立てた両膝に顔を押し当てた。髪が横顔を隠してしまう。泣いているのか。確認しようとしてウェンディを見つめる鳶春だったが、今ひとつ確信が持てない。

「泣いてるのか？」

怒られることを覚悟して尋ねる。しかしウェンディは返事をしない。

「ウェンディ？」

呼びかけた鳶春が気まずくなるほどの間をあけて、ウェンディは頭を上げた。さっきよりも虚ろな顔をしている。

「なに？」

「いや……。ごめん。こんなことになって」

「別に、いいけど」

あきらかに様子がおかしかった。声に締まりもない。

「おい、ウェンディ」

鳶春はウェンディの腕を引っ張る。

「んー。なに？」

「大丈夫か。しっかりしろよ」

「うん。まあ」

鳶春はウェンディの腕を放す。ウェンディは鳶春の方を向いたまま、時々ゆっくりとまばたきをする他には動かない。

突然、ウェンディは勢いよく頭を振った。黒髪がはためく。それからウェンディは自分

の頬を数回、軽く叩いた。

「ごめん。ひょっとしてわたし、ぼーっとしてなかった？」

ウェンディの急な変化に戸惑いながら、鳶春はうなずく。

「おかしくなったのかと思った」

「そんなワケないでしょ」

ウェンディは明るく笑った。

「でも、あれは誰だってそう思うんじゃないかな」

「ま、とにかく、どうしようか」

軽い口調でウェンディは言う。

「どうしようもこうしようも。とにかく、あんまり帰らないようだったら誰かが探してくれるんじゃないか？」

自分たちを閉じこめた人間が放っておいてくれれば、という言葉が鳶春はあえて言わなかった。

「一晩くらいなら大丈夫かな」

「なにが」

「ん？ 伯父さんにバレないでいられるのが。事件の捜査とかでほとんど帰ってこないから」

閉じこめられて初めて、鳶春ははっきりとした焦りを感じた。

「伯父さんって、たしか刑事なんだよな？」

おずおずと尋ねる。

「そ。お父さんと違っていかつくてさ。あんまり喋らないし。ほら、尋問なんかで怖い刑事と優しい刑事の役割があるって言うでしょ。伯父さんはどう見ても怖い刑事の役かな。わたしがもし男の子と一晩、外で過ごしたなんて知ったら。うーん。どうだろう。補導だけで済むかなあ。ほら、こんな感じ」

ウェンディはそう言うと、端末へ一枚の写真を表示した。気難しそうな男が映っている。頭も体も大きく、威圧感がある。太っているのではなく、骨格から大きいのだ。引き結んだ口と、本人も意識していないに違いない眉間のしわ。寝起きを撮影したようで白髪交じりの寝癖が立っているが、それさえも印象を和らげていない。細い目は僅かに見開かれていて、光の加減かも知れないが、妙に瞳孔が小さいようにも見えた。

写真に見入る鳶春へ向かって、ウェンディは微笑んだ。面白がっているのがありありと判る。不安じゃないというのは本当のようだった。

「あなたこそ、両親は心配しないの？」

「心配する。すごく」

なるべく考えないようにしていたことが、避けようもなく浮かんでくる。親のこともあるが、それより気がかりなのは自分の体のことだ。今の状態が長引けば、やがてエネルギーが切れる。そうすると生身の人間とは違って、全く動けなくなってしまう。やがては生命維持もできなくなって、脳が死んでしまうだろう。昼に充電したからしばらくは保つだろうが、油断はできない。

事実を話すべきか鳶春は悩んだ。今後、ウェンディから恋愛の対象として見てもらえる可能性が完全になくなるかも知れない。これまではその考えが、体について打ち明けるの

をためらわせてきた。けれども、エネルギーが足りなくなったら取り返しがつかない。そうになったら隠し通すことはできない。迷っている余地はないようだった。

「大事な話が、あるんだけど」

ウェンディは黙って、続きを促すような仕草をした。ただ、少し身構えている。告白されるんじゃないか、というようなことを漠然と予想しているのが判って、鳶春はその場から逃げ出したくなった。どうにか次の言葉を発する。

「実は、おれの体、ぜんぶ機体なんだ」

早く終わらせてしまいたいという思いのせいで、おもいきり端的な言い方になってしまった。

「えーと、つまり どういうこと？」

もっともなウェンディの反応に、鳶春は緊張がほぐれるのを感じた。

鳶春が自分の体が機体になった経緯や、それがどういうことなのかを説明するあいだ、ウェンディはおとなしく耳を傾けていた。

「なるほど。苦労したってわけね。でも、どうして今まで黙ってたの」

拍子抜けするほどウェンディの態度が普段と変わらないため鳶春は少しだけ傷ついたが、それでも渡欧に困られるよりはマシだと思い直す。

「変に気を遣われるのも嫌だったから」

「へえ。ま、それならいいけど」

なぜだかウェンディは鳶春の答えが気に入らないようだった。

鳶春は床に体を横たえ、目を閉じた。

「どうしたの？」

「無駄なエネルギーの節約」

そのまま寝転がっていると、自動的に体がスリープモードになった。全身の力が抜け、背中を支える草の感触が遠のく。やがて眠気が押し寄せてきた。

「ホントにこれが機体なの？」

ウェンディが手を取り、持ち上げたり下ろしたり、ひねったりしているのを臍気に感じる。それはぶしつけな行為だったが、相手がウェンディだと思うと腹も立たなかった。目覚めるでもなく眠るでもなく、鳶春は自分の手がウェンディにもてあそばれていることに心地よく身を任せた。

どれくらいそうしていただろうか。ウェンディの手が離れた。触れられていた感覚が急速に逃げていく。鳶春は無意識に、その感覚へすがろうとする。

「本当はね。悪かったと思ってるんだよ。こんなことに巻き込んで」

どこかスネたような口調だった。自分の引き起こした結果へ自分で途方に暮れている子供みたいだった。くふっ、と鳶春は笑い声を漏らした。体が休止しているせいでそれは小さな空気が漏れる音にしかならなかったが、ウェンディにも鳶春が笑ったことは伝わった。

「ちょっと、寝てないじゃない！」

ウェンディは鳶春を遠慮なく叩く。生身ならけっこう痛いだろう強さだ。

「寝るなんて言っていないだろ」

鳶春はたいして動かない口で不明瞭に告げる。

「ずるい。あなたはかなりずるいよ、それ。悪かったと思ったわたしが悪かった」

こみ上げるウェンディへの愛おしさが、笑い声になって溢れ出る。

「そうやって馬鹿にして」

勘違いしたウェンディが鳶春の体を揺する。なおも笑っていると、急に眠気が強まってきた。ああ、今度こそ寝るな。そう意識したところで、鳶春の記憶は途切れてしまった。

重たいもの同士がぶつかる鈍い音。不安定でうわずっていて、とにかく不愉快な悲鳴。そこで鳶春はやっと、自分が寝ていたことを思い出す。取りあえず身を起こそうとして、鳶春は体が全く動かないことに気付いた。それどころか五感の全てが鈍っている。意識も一向にまとまらず、気を抜けば再び散り散りになってしまいそうだった。どれくらいの時間が経ったのか、強烈な空腹感だけが厭に生々しい感覚として存在していた。

ウェンディの声が聞こえた。なのに、何を言っているのかも解らない。

「……で。誰が。こんな。連れ」

男の声が切れ切れに理解できる。ああ、声変わりだ。ぼんやりと鳶春は思う。級友たちだけが通り抜けてきた、出力の安定しない声。男は声変わりも終わりかけの時期らしい。なぜだか鳶春にはそれが確信できた。

「いやだ。これが、なのか？ こな。じゃ、そ いる……」

また男の声がする。さっきよりはよく聞こえる。

場違いなほど鳶春は穏やかな気持ちだった。自分のどこかが危険を感じているのに、それは切り離された遠い場所のことを知らせているようだった。

バッテリー、何日かは保つて話だったのに。取り留めのない意識は漂いながら、そんな思いにつかのみ、焦点を結ぶ。それとも、自分は何日も眠り続けてたのか。

「そう」

さっきと同じ、女の声。でも、それがウェンディの声だという自信は消えていた。もう、何の音も聞こえない。背中が触れている床の感触さえない。意識が、また、途絶え、る。